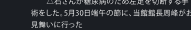


7月7日午前、当館は抗日戦争勃発87周年記念行事を開催した。南京大虐殺生存者の遺族代表、小学生代表、見学者代表、記念館館員代表ら87人が参列した。87年前のこの日、日本軍侵略者は世界に衝撃を与えた盧溝橋事件を引き起こし、それによって中国人民の全民族抗日戦争の序幕が開かれた。

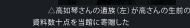
この夏、記念館が見学のピークを過ぎた。開館時間延長（8:30—18:00）や防暑対策の導入、ボランティア活動などを通じて見学者に快適な体験を提供した。



南京大虐殺幸存者石秀英さんが7月12日早朝、98歳で逝去した。1937年、石秀英さんの父と兄は日本軍に連行されたあとに殺害された。母親が臨時雇いの仕事に強いられ、苦勞して幼い子供を養った。2015年12月9日から14日までの間、石秀英さんは日本の熊本、長崎、福岡を訪れ、南京大虐殺幸存者証言集会に参加した。



7月18日午前、今年に亡くなった程福宝、陳桂香、劉素珍、高如琴、石秀英、計五人の生存者の冥福を祈るために、当館で清灯式を行った。

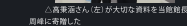


南京大虐殺の生存者周志林さんが7月20日、99歳で亡くなった。周さんは1925年12月23日に生まれ、1937年、彼の家族は南京市江寧区麒麟鎮洛家窪に住んでいた。侵略してきた日本軍は彼の祖父を射殺した際、彼は祖父から十数メートル離れた地面に横たわって、死んだふりをして死を免れた。



今年で90歳近くになる台湾の弁護士高素翰さんは、1935年に中国山東省の萊陽で生まれ、1948年に13歳で家を出て南京に戻り、その後台湾に渡った。大陸との往来が再開後、高さんが百名以上の台湾で亡くなった兵士の遺骨を大陸の故郷へ送り込んだため、2012年度「中国を感動した十人」に選ばれた。7月6日、高さんは記者会見がけ、日本侵華由深究録(劉成編)「戦犯谷寿夫判決書正本」の六冊の貴重な本や新聞紙、直筆の手紙などを記念館に寄贈した。

記念館を後にした彼は、思わず涙を流しながら、「台湾に帰ったら、台湾の若者に南京大虐殺の歴史を知ってもらうために、学校に行って話をしたい」と語った。



7月14日午前、日本「平和の旅訪中団」が当館を訪れた。その訪問は今回で29回目となった。

国長青木雄次さんは、現在の日本の軍備増強や歴史を否定する流れに懸念を示した上、今回の訪問も、国員たちと一緒に、日本国主義が中国に対する侵略および南京大虐殺の歴史を改めて認識でき、被害者に申し訳ない気持ちを感じていると話した。「歴史の真実を学ぶ、歴史を通じて悲劇が繰り返されるのを食い止めることは、私たちの重要な使命だ。歴史を学ぶことは日本友好のためであり、歴史を忘れないことは東洋の平和のためだ」と語った。

